

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	佐藤 文子（京都府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第53号
学位授与の日付	平成25年5月22日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学位論文題目	日本古代の政治思想と宗教政策に関する研究
論文審査委員	主査 中井 真孝（佛教大学教授） 副査 門田 誠一（佛教大学教授） 副査 宮崎 健司（大谷大学教授）

〔1〕論文の概要

「日本古代の政治思想と宗教政策に関する研究」と題したこの論文は、学位請求者（以下、論者という）が学会誌等に発表してきた論文を体系的にまとめたもので、序論「史学史としての〈国家仏教〉論と古代史研究の課題」（新稿）および第一部「優婆塞の実像と古代の社会・権力」、第二部「古代の政治思想と天皇権力」、第三部「得度問題からみた権力と宗教」の3部8章から構成される。

序論「史学史としての〈国家仏教〉論と古代史研究の課題」では、既成の古代国家論の中核に据えられている〈国家仏教〉論を取り上げる。論者は、史学の立場から〈国家仏教〉という概念を創出したのは黒板勝美であり、聖武天皇の仏教事業を国家的と位置づけ、廃仏論的立場から仏教の弊害を説く従来の歴史概説を一変させたという。その後、井上光貞が黒板の〈国家仏教〉論に二葉憲香らの〈律令仏教〉論を吸収するように学説を構築し、その結果もともと二つの概念を〈国家仏教〉という一つの語に収斂させたとする。これ以降、国家による仏教興隆と仏教統制の二本立てで概説がなされ、その枠組みを用いて具体的事例を嵌め込んでいくようになったと述べる。

第1部の第1章「優婆塞貢進の実像とその史的意義」では、正倉院文書の優婆塞貢進文の分析を通じて、天平期の度人推薦の実態を論じている。論者は、鬼頭清明が貢進文を3類に分けるのを批判し、8類に細分することを試みることで、文書の年紀と一括の単位を併用して、貢進文を編年の物差しの上に載せた。文書の二次使用場所から割り出された貢進文の提出先は、太政官管下官司ではなく、光明子の皇后宮職であったと推測する。優婆塞貢進における度人推薦は、天平6年（734）太政官符がいうように、当時頻繁に行われていた「囑請」による得度であり、貢進者（推薦者）の階層（皇親・貴族・上級僧尼）にと

って、近親者を得度させる既得権と認識されていたと考えた。

第Ⅱ章「日本古代における得度前行者の存在形態」では、出家得度して沙弥となる以前の段階にあって、得度を目指して修道する俗人の存在形態に注目する。中国では有髪俗体で寺内に居住して修道する者を童子・行者の意から「童行」と称したが、出家して童行となって修道生活を送り、剃髪得度を経て僧尼となるという二段階制がシステムとして定着していた。論者は、日本でもこの二段階制が採られており、得度を目指して寺内で修道する優婆塞・童子といった得度前行者の存在を指摘する。なお、中国では宋代に至って童行が身分把握されるのと対照的に、日本では9世紀中葉以降、得度前行者は消滅の途をたどるという。

第Ⅲ章「白衣について」では、得度前行者に特徴的な「白衣」という外的形態について考察する。「白衣」で指示される概念は、古代では得度前の俗人修道者を意味したが、中世では朝廷が認める官僧身分の僧を意味するようになったという。

第二部の第Ⅳ章「淳仁朝の造宮計画―宮の新営と天皇権獲得の原理―」では、淳仁朝の小治田・保良宮への「行幸」「遷都」という事象を手がかりに、古代の天皇権の獲得と発動について論じている。論者が注目したのは淳仁の「臨軒」記事である。「臨軒」は大極殿出御のことではなく、天皇の正座でない座に出御することを意味するという。淳仁が「臨軒」を繰り返したのは、天皇権の確立に至っておらず、天皇権の発動のための装置―正宮・正殿・高御座―が不全であった状況を示しているとする。日本古代の天皇権が、血統の優位性よりも、むしろレガリアの獲得によって承認されており、それが宮の新営に表象されると指摘する。

第Ⅴ章「郊野の思想―長岡京城の周縁をめぐって―」では、長岡京城の周縁地域を素材に採り、都城郊外の構造・機能、それを縁取る思想について考察している。都城研究において、都城と相互に影響しつつ展開した「郊野」の歴史は注目されて来なかった。「郊野」は都城を消費地とした生産地の役割のみならず、都人の葬送や隠棲の地となり、身近な鄙として機能したと論じている。

第三部の第Ⅵ章「古代の得度に関する基本概念の再検討―官度・私度・自度を中心に―」では、古代史研究の基本概念である「官度」「私度」「自度」の語義について、厳密に検討を行っている。従来の語義解釈の問題点を指摘した上で、「度」が得度させるという意味の他動詞として使われていたと提起している。すなわち「官度」は「官」（公権力）が人を得度させる行為を指し、「私度」は私的権力が人を得度させる行為を指す。従って私度の刑罰は、得度した人物に対してではなく、得度させる行為をした人物に科せられると解した。「自度」は自分で自分を得度させた者を指し、彼らは法名を持たず、教団内部に依拠していなかったという。

次に、第Ⅶ章「延暦年分度者制の再検討」では、延暦17年（798）から同25年（806）にかけて整備され、実施された延暦年分度者制の特質とその歴史的意義について論じる。延暦年分度者制の内容を吟味すると、官人の養成および登用のシステムを応用したことが明らかで、ここに日本の得度制は唐制の模倣の段階を脱し、日本の実情に合わせたものへと転換したと述べる。延暦25年制は、各宗に度者の推薦枠を振り分ける「宗分度者」であったので、天皇の勅によって実質的な度人權を認める形が定着し、官僧の存在が、天皇の認める所の「宗」が認める身分という重層的な権力構造のもとで位置づけられたと強調す

る。

最後に、第Ⅷ章「臨時得度の政治思想」では、これまで臨時得度に関する専論がなかったのは、古代史の枠組みが〈律令体制〉論によって規定されるなかで、天平期に臨時得度が最も大量に行われたという事象を整合的に説明できなかったからであると見て、臨時得度は、古代権力と仏教活動をつなぐ文脈を究明する重要な課題であると問題提起する。臨時得度は大赦や賑恤などと並んで、天皇の徳治の一環として実施されたが、ほんらい儒教思想に基づく徳の概念に、仏教的功德の思想が混淆した状況を呈するという。論者は、隋唐時代に盛行し、8世紀の日本に受容された『出家功德経』に注目し、同経が最も功德があると説くのは、篤信者が自身に隷属する者を解放して出家させる行為であるところから、さまざまな権力主体が人を出家させる思想的動機となったと主張する。『出家功德経』などの諸功德を説く経典の論理が、臨時得度を頻繁に実施させ、さらに大規模な仏教事業へと誘引していったと論じる。さらに論者は、こうした観点が国家による仏教興隆と仏教統制の二本立てで説明されてきた〈国家仏教〉論を超えて、権力と仏教活動の関係を明らかにし、古代社会の権力構造を分析する糸口になると結論づける。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文は先行研究を批判的に検証し、宗教政策および政治思想を具体的に分析することで、日本古代の社会と権力の特質を明らかにしようとした論考である。論者は常に新たな課題を設定し、新たな分析方法を試みて考察を行うという研究姿勢が本論全体に通底していることを特筆しておきたい。

さて序論において、〈律令体制〉論の中核となる〈国家仏教〉論について、史学史の立場から批判的に検証している。〈国家仏教〉論は、近代に政治的な必要性から創出されたもので、一時衰退するが、唯物史観との親和性を持ちながら、〈律令仏教〉論を包摂して現在に至っていると分析する。それが〈国家仏教〉論の「興隆」と「統制」という二面性を生み出したと見ている。〈国家仏教〉論の「興隆」と「統制」の二面性は、そもそも併存しない二項対立的概念なのか、歴史事象における紙の表と裏のごとき二律背反的な側面なのか、異論のあるところだが、論者の研究の立場を示すものとして評価できよう。

第一部では、戦後に流行した「国家と民衆」という二項対立の図式の中で、民衆側の象徴的存在とされてきた在俗仏教者（優婆塞・優婆夷）について、優婆塞貢進文や『日本霊異記』などの詳細な分析を通して、その実態を明らかにしている。その結果、彼らが常態として官僧の母体層となっており、必ずしも国家と対立する存在ではないという注目すべき指摘を行なっている。なお、優婆塞貢進文の年代推定に考古学的手法を用いたことは斬新である。

第二部は、宮都造営の契機や周縁部の機能の分析を通じて、宮都のもつ政治的・思想的意義を検討し、天皇権力の特質について考察している。淳仁天皇を事例に、天皇権力の確立・発動には、その装置として正宮・正殿・高御座が必要であり、恒常的な宮都の平城宮が成立した後も、それ以前の歴代天皇遷宮の伝統が底流にあったと指摘する。また長岡京の事例を通して、都城外の周縁地域を含む、いわば京城観が存在していたと指摘する。これは既存の都市論に一石を投じるものといえよう。

第三部は、日本古代における出家得度の思想、権力との関係を検討し、古代権力の仏教活動とその思想的背景について論じている。得度に関する基本概念を再検討すると共に、唐制を引き写す形で移入し、実態との間で紆余曲折をへた得度制度が、延暦年分度者制となって初めて日本独自のものとなったとする。そして延暦年分度者制は官人登用制度を下敷きとし、天皇を頂点とする重層的な権力構造のもとに位置づけられたと指摘する。さらに大量の臨時得度や大規模な造寺造仏という現象が、功德經典の受容から知られる権力者の欲求に起因したとする。こうした観点が、「興隆」と「統制」という二面性で説明されてきた〈国家仏教〉論を超える議論になりうるという方向性を示している。

本論文を総括していえば、僧尼や得度の問題を、単なる宗教政策の枠内に閉じ込めず、古代の為政者の背後に存する政治思想や古代社会の実像を探るための、古代史研究の重要課題に位置づけることを問うているのである。

以上、本論文の評価すべき諸点を述べたが、まったく問題がないわけではない。まず、論文構成に関していうと、既発表論文による編成のため仕方ないと思われるものの、論旨の重複がしばしば見受けられる。同様に発表時の掲載誌の性格、対象読者の相違からくる文体の不統一や、実証の厚みに精粗の差が現われている。学位論文としての体裁を保つためには、ある程度の統一が求められるのではないか。

また、「日本古代の政治思想と宗教政策に関する研究」という論題からは、大きな括りとして各部に問題意識の共通性があるだろうが、第一部と第三部が僧尼の得度制に関する考察であるのに対して、第二部は宮都や郊野など都城空間に関する考察であって、違和感を免れない。第二部が論文全体の中でどう位置づけられるかを、序論等で丁寧に述べるべきであったと思われる。さらに注文をつけると、第一部と第三部が精細な密度で論じているのに比べて、第二部はやや概念的かつ演繹的である。例えば第Ⅴ章の郊野に関する部分は、論拠として提示された史料からは、桓武天皇の郊野に対する政策を直接説明できず、考証の精度は高くないのである。

次に個々の問題に移ると、第Ⅰ章の図1に示された反故紙の二次使用のあり方の概念図は、読者にとって理解しやすいものであるが、実際の正倉院文書の状態からすると、正確とはいえず、かえって誤解を招く恐れがあるように思われる。また、「嘱請」による得度が具体的にどのように行われたのか明示がなく、物足りなさを覚える。

第Ⅱ章において、『令義解』や『令集解』が成立する8世紀末から9世紀前葉の段階で、「白衣」が得度前行者を指す人稱として通用したというが、明法家がいう「白衣」とは単なる「俗人」の意でしかない。本章および第Ⅵ章での『令集解』僧尼令私度条の解釈は、やや恣意的と思われる。

その第Ⅵ章においても、「私度」の定義に疑義が存する。論者は「私度」とは私的権力が人を得度させることであるとして、その私的権力とは唐の戸婚律私入道条の条文と疏議に見える「家長」「本貫主司及観寺三綱」「監臨之官」が相当するという。しかし、「本貫主司及観寺三綱」「監臨之官」は公的権力ではなかろうか。むしろ疏議の中で注目すべきは「官司が私度」することがあると述べている点であり、「私度」は公的権力も関わることをあることを見逃してはならず、史料を丹念に読むべきであろう。

第Ⅶ章の、延暦17年勅から延暦25年太政官符に至る制度変遷の背景について、延暦17年勅の急激な改革路線に対する反発があったと想定するが、本論全体が実証的な検証を踏

まえた叙述が多いことから、この場合にも具体的に実証して欲しかった。また論者は、延暦年分度者制が官僧の概念を根本的な転換を図るものであったと考えるが、どのように変わるのかという見通しを提示していない。法制史の立場からすると、「一般白丁から課税免除身分への移行」という得度制の定義はこの後も何ら変わらないのであるから、官僧の概念を根本的に転換させたとは言えないのである。

第Ⅷ章において、権力者が人々を出家得度させたいと考えた背景として、『出家功德経』など功德經典の受容を指摘した点は興味深いが、そこで示された正倉院文書における書写状況は、ほとんどが一切経の内として書写した史料で、これら功德經典が単独で書写された事例は少なく、具体的に受容された実態を示すものとは断定できない。

以上、幾つかの問題点を指摘したが、これらによって本論文の全体的な評価を下げるものではない。今後、論者のしかるべき訂正や再考を期待するところである。よって本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと思料する。